

若者支援の理念と実践

但馬地域福祉事業所 上村俊雄

1. はじめに

<本講義の狙い>

- 若者支援が必要とされている理由を社会環境の変化と当事者の生きづらさから捉える
- ワーカーズコープは若者支援でどのような役割を果たしてきたか、果たしていくのかを知る
- 若者支援と子育て事業のかかわりを知る

2. なぜ若者支援が必要なのか『社会環境』

<若者の抱える苦悩>

- 「生きづらさ」の象徴としてのひきこもり

フリーター、パラサイトシングル、ニートなど、社会に出にくい若者たちは様々なレッテルを張られ、その都度議論を呼んできました。現在では、そうした若者が高年齢化する中で、「中高年のひきこもり」「8050 問題」「子供部屋おじさん」など、より高い年齢層の課題としても取り上げられています。そうしたなかで、若者の「生きづらさ」を象徴する存在として、1990 年前後から注目されてきたのが、ひきこもり状態に置かれた方々です。2015 年の調査では、15 歳から 39 歳のひきこもりは 54.1 万人、2018 年度の調査では、40 歳から 64 歳のひきこもりが 61.3 万人という衝撃的な結果が出ています。

- 過剰な「自己責任論」が生む排除と承認の不在

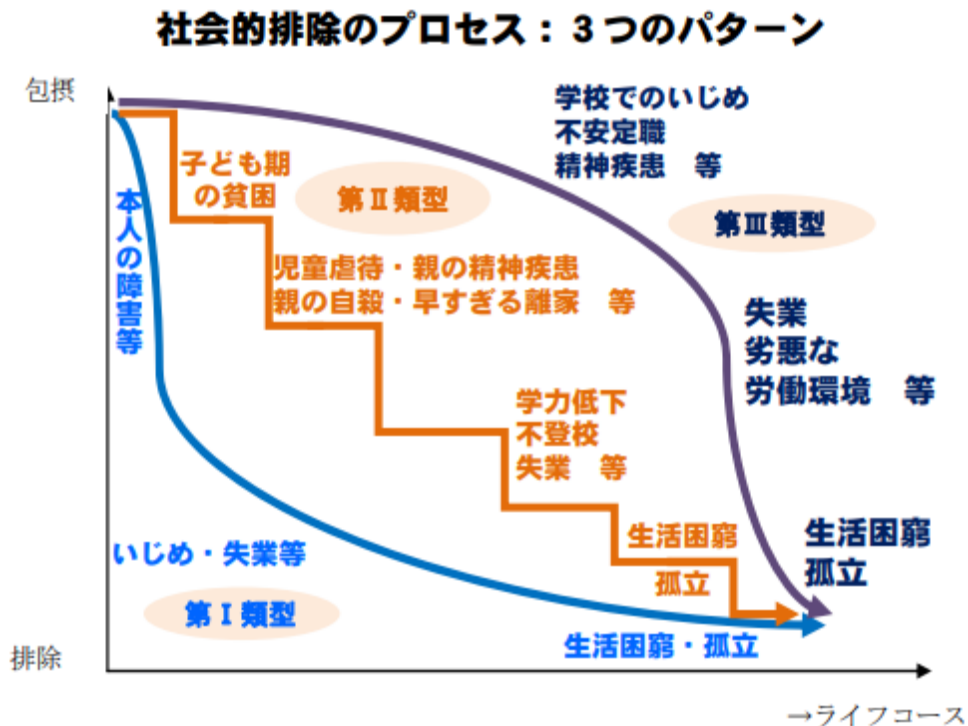
現代の若者たちは様々な困難に直面しています

- ・拠点となるべき自宅(家族)が居場所にならない
- ・地域が希薄化し、多様な関係を構築する機会を失っている
- ・学校や職場の荒廃や競争圧力の下で傷つけられてしまう
- ・大学生の 3 人に 1 人は奨学金を活用し、卒業後は借金として返済に迫られる
- ・自尊感情が深く傷つけられ、社会に出ていく自信を奪われてしまう
- ・存在承認ではなく成果承認を受ける欲求不満
- ・etc. . .

- モデルのない時代を生きる若者

- ・孤立や困窮の問題は現代を生きる多くの若者たちに共通する生きづらさでもある
- ・労働市場の不安定化は若者の職業的自立を困難にするばかりか、親世代も含めた社会全体の格差拡大と貧困化をもたらしている
- ・これまでの人生モデルが通用しなくなっている(大卒後の就労、終身雇用の崩壊、AI など)

<社会的排除と孤立>



(『社会的排除にいたるプロセス～若年ケース・スタディから見る排除の過程～』平成 24 年 9 月 社会的排除リスク調査チーム、内閣官房社会的包摂推進室／内閣政策統括官＜経済社会システム担当＞より)

【第Ⅰ類型】

知的障害や発達障害など本人のもつ生きづらさが原因で、最も早い時期に問題が表出します。そのことが若者期にもそのまま続いていきます。

【第Ⅱ類型】

子ども期の貧困や児童虐待などの家庭環境が問題で、子ども期に表出し、若者期まで続いていきます。

【第Ⅲ類型】

いじめや不安定就労など、学校や職場の環境の問題で、比較的遅い時期に表出します。

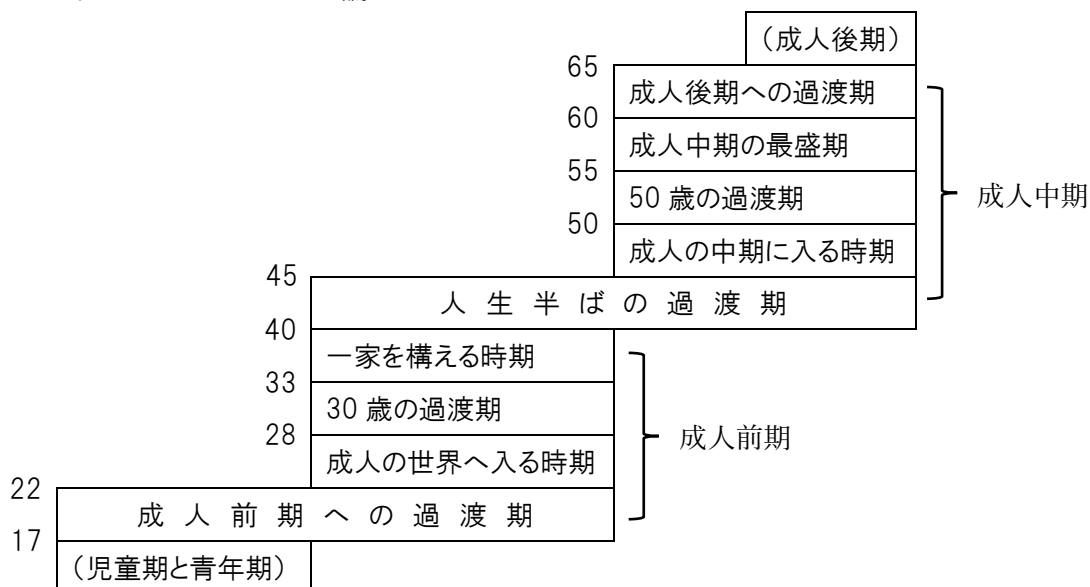
3つの類型による違いはありますが、幼少期、学校期、社会に出てから、と各々の段階で生じた問題が若者期に合流します。そういう意味で若者支援には総合政策が必要となるのです。

(若者政策提案・検討委員会, 『若者政策提案書』, ビッグイシュー基金, 2005, P4 より)

3. なぜ若者支援が必要なのか『発達段階』

<生涯発達から見た若者>

D. レヴィンソンのライフサイクル論



人生の段階(Levinson, 1982 より)

レヴィンソンは成人の発達が生活構造の安定期と過渡期が交互に現れて進んでいくと捉えています。安定期の発達課題は重要な選択を行い、生活構造を築き、自分の目標と価値観を追求することです。過渡期の発達課題はそれまでの生活構造を見直し、自己と外界を変える可能性を模索し、新しい生活構造の基盤となる重要な選択を行うことです。

<どのような“躓き”が若者を挫くのか>

- ・子ども期の貧困や虐待
- ・本人の障害や特性への無理解
- ・不登校やいじめ、学校生活の不調
- ・大学生活への不適應
- ・就職活動の失敗や失業
- ・劣悪な労働環境
- ・etc. . .

若者支援として「支援される若者」を生み出していますが、あくまでも社会の矛盾や問題の影響を受けやすい立場にある人がそのような若者として表れているだけのように感じます。

4. 政策としての若者支援

<若者自立支援の歴史>

○ 別添資料 1:若者自立支援の歴史 参照

<現在の若者支援政策>

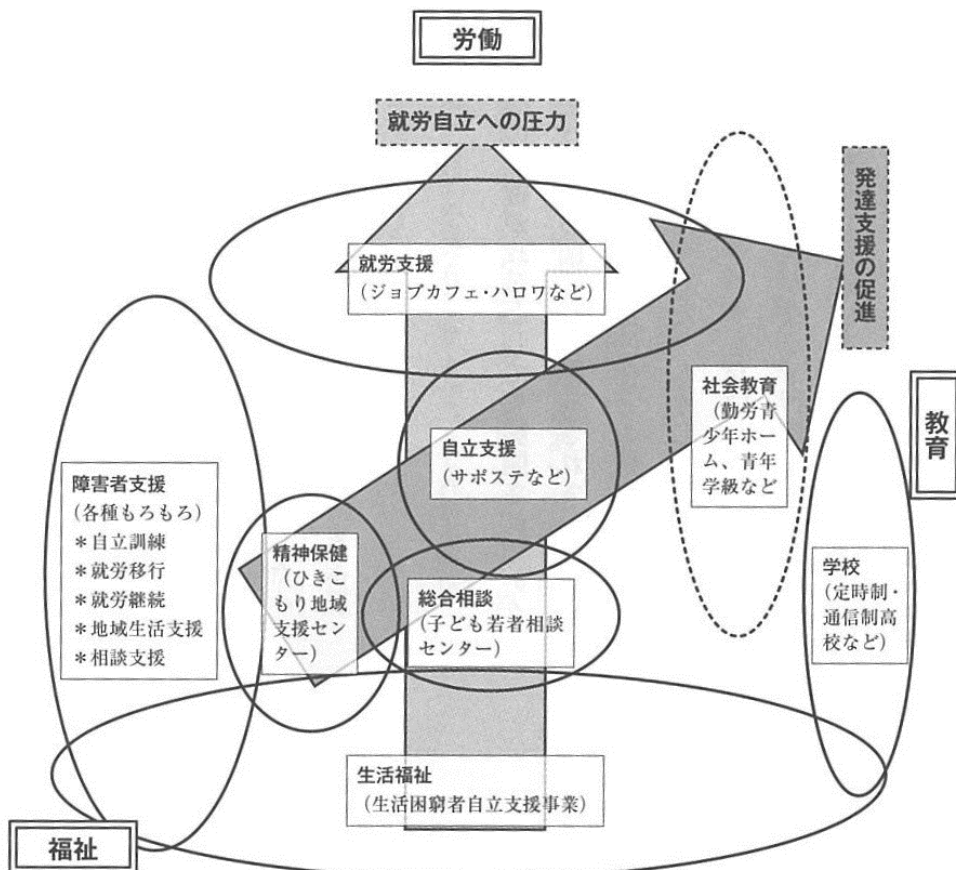


図2 若者支援関連施策の分布図

(南出吉祥「若者支援政策の変遷とその課題」『総合社会福祉研究』第45号、2015年)

(若者支援全国協同連絡会、『「若者支援」のこれまでとこれから』、2016、P59 より)

5. ワーカーズコープの若者支援（共にはたらく実践）

＜若者支援政策との関わり＞

- ・別添資料 2: ワークスコープの歴史から見た源流 参照
(大高研道, 『社会的困難にある人と共に働く職場づくり調査報告書』, 2018 より)
- ・別添資料 3: 労協新聞「若者自立塾開始」 参照

＜若者支援の関連事業＞

- 若者サポートステーション
- ひきこもり支援(別添資料 4: 労協新聞「ひきこもり支援ひととわ」 参照)
- 生活困窮者支援・生活保護受給者支援
- 就労訓練事業
- 障害者支援(就労移行支援、就労継続支援、他)
- フードバンク
- 子ども食堂・地域食堂
- etc. . .

＜事業運営上の視点＞

① ともに働く

「協同」とは、「心を合わせ、力を合わせ、助け合って仕事をする事」。清掃、物流、緑化、配食、子育て、介護、公共施設運営、林業や農業など、さまざまな現場で、困難を強みに変えて、ともに働く職場をつくり、ともに成長してきました。

② 制度を活用

2000 年に介護保険制度が施行されると、私たちは全国でヘルパー講座を開き、各地に地域福祉事業所を開設しました。それ以降、国・自治体の制度を活用して、地域づくりにつながる事業に取り組んできました。15 年に開始された生活困窮者自立支援制度を主軸に、個々の“働きにくさ”を、私たちの社会の課題ととらえ、解決に向けて地域全体に呼びかけてきました。

③ 地域の中で

地域がいいきしななければ、“働くこと”の困難は続きます。私たちは、協同労働を「一人ひとりの願いをみんなの手で叶えることのできる働き方」、「すべての人の居場所となる働き方」などと表現し、地域に発信してきました。地域が本来持っている価値や資源を活かし、さまざまな人・団体とつながり、持続可能な地域づくりへの挑戦を進めています。

6. 事例など

- 別添資料 5-8:『このまちで とともに 歩んでいく 実践事例集』より抜粋

7. まとめ:若者支援と子育て事業

生きづらさを抱える若者も生活困窮者もあらゆる人たちが“子ども”でした。そして、大人になって突然生きづらさを感じるケースはそう多くはないと感じています。“子ども”の頃から家庭が貧困状態にあった、家庭内不和があった、学校生活の不調があった、発達特性や HSC 等の特性が周囲に理解されていなかった、どれも幼少期の小さな世界の中ではとても大きな出来事です。そんな時に誰か一人でも寄り添って理解してくれる人がいれば、大きな助けになると思います。「もっと早いタイミングで SOS がキャッチできていれば」、若者や生活困窮者に出会う中で日々感じることです。

もう一つ、子育て事業や若者支援事業での親支援も大事な視点だと思います。子どもたちの育ちをだれが一番身近で支えているのかを考えれば、親の悩みを解決することが最も子どもの育ちにとって重要であると言っても過言ではないと思っています。ひきこもりの支援でも、親の気持ちを楽しめることで支援が進むことは非常に多いです。

子育て事業の何たるかは皆さんの方がよくご存じだと思いますので、「かくあるべし」とは示せませんが、皆さんの日々のかかわりが本人の 10 年先やその先の人生を大きく変えるのかもしれない。そうした意味では「対処療法」になりがちな私たちよりも、皆さんの方がよほど『若者支援』であると思います。ぜひ、子どもたちに自己肯定感が高まり、主体性が尊重されるような環境を提供してあげてください。そして、そうした環境を地域や社会にも広げてください。きっとそれが本物の『若者支援』です。

※ 個人の感想です。まとめには個人差があります。

8. 結びに

但馬地域福祉事業所では、「次世代に遺す山づくり」という視点で林業チーム「NextGreen 但馬」を立ち上げ、林業の運営と並行して、イベントなどを通して山と人をつなぐ取り組みを続けてきました。2019 年度は「豊岡市こどもの野生復帰事業」を受託して、自然体験を通して子どもたちの冒険心や挑戦心、創造力を育む活動も行いました。

地域にどんな学びの環境があれば子どもたちの育ちを支えられるのか、但馬の事業所では「自然」の中での学びが大事ではないかと考えています。今後は「森のようちえん」として事業化していくことや、市民も巻き込んだ『協育』の場を提供できるような取り組みに発展させていくこと、それが若者支援に取り組む事業所として取り組むべきことではないかと考えています。

別添資料 9:但馬での実践とこれから 参照

※ 個人の感想です。今後の実践には個人差があります。